

河 原 で の で き こ と

生徒指導を視野に入れた取組み

- (1) 主題名 自主自律〔 1 - (3) 〕 関連項目〔 4 - (2) , 4 - (6) 〕
 (2) ねらい 自ら考え, 自主的に行動し, その結果に責任をもとうとする態度を育てる。
 (3) 資料名 「河原のできごと」
 (4) 授業の展開例

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点
導 入	1 バイクに焦点化する。	将来, とってみたい資格や免許は何ですか。 ・ヘルパー(介護士) ・車, バイクの免許 ・情報処理	多くの人が二十歳までに取得する車やバイクの免許に視点を当て本時の学習の導入にする。
展 開	2 資料を読む。	なぜ, 健二はバイクに乗ったのでしょうか。 ・友達に誘われたから ・運転するのではなく, 後ろに乗るだけだから	役割演技などを必要に応じて取り入れる。
	3 健二の気持ちを考える。	警察に来たお母さんに会って, 健二の気持ちはどのように変わりましたか。 ・心配かけて申し訳ない ・何て馬鹿なことをしたんだろう	何が正しく, 何が誤りであるのか主人公の立場で考えさせる。
	4 お母さんの気持ちを推察する。	なぜ, 小さな見出しがトップ記事のように大きく見えたのでしょうか。 ・自分のとった安易な行いのため, 未だにお母さんを悲しませているから	自分自身にかかわる行為が自分や他人にどのような結果をもたらすかについても深く考えさせる。
	5 責任ある行動について考える。	家庭裁判所で健二が調査官に「お母さんを二度と泣かせたくないと思います。」と答えたときの気持ちを想像してみましょう。 ・今後, 絶対にお母さんに苦労はかけない ・自分の行動には責任を持つ	『生徒指導の手引き』を参考に積極的生徒指導の視点も含めて行動の善悪を考えさせる。
終 末	6 もう一度自分を見つめ直す。	自分の生活を振り返り, 似たような経験を想起し, ワークシートに書く。教師の説話や友だちの話を聞く。	「心のノート」P.11と P.13を開き自己を見つめ直す機会に活用する。

「河原でのびぎっじ」

健二は中学三年生。お母さんとの二人暮らしです。お母さんは保険会社の外交員として一生懸命生計を立て、夜遅くなることが多い生活ですが、一人息子の健二をとてかわいがっています。しかし、一人で父親の分も頑張らなければという思いから、最近では口うるさい母親を演じるように努めています。健二にはそれが気に入りません。夜も一人でいることが多い健二は、中三になってから友だちに夜遊びに誘われることが多くなったのですが、もちろんお母さんは絶対に許してくれません。健二はそれが不満でした。口答えすることも増えました。

ある晩、やはりお母さんがまだ帰っていないときに同級生の拓也が遊びに来て、こう言い出しました。

「大輔たちが河原で原付乗り回して遊んでいるの知ってるか？俺たちも行こうぜ。」

どうせ一人でつまらなかったし、お母さんに反抗してみたい気持ちもあった健二は、その話に急に興味が湧いてきました。そして、「健二、母ちゃんに怒られるんじゃないか。」と冷やかされても「あんなやつ怒ったって平気にきまってる。」と強がり言つて、拓也と一緒に出て行きました。

二人が河原に行くと、大輔達が交替で一台の五〇ccに二人乗ったり、三人乗ったりしながら河原をぐるぐる回って遊んでいました。二人を見付けた大輔が、「お前達も乗りなよ。」と声をかけてきました。どうしようか迷っている健二に拓也が「おもしろそうじゃん。行こうぜ、健二。」と言つが早いかバイクにまたがりました。

「早く来なよ。発進するぞ！」

二人の呼びかけに、とうとう健二は「後ろにまたがっているだけだし、まっ、いいか。」と拓也の体にしがみついて、大輔が運転するバイクに三人乗りして遊びました。

ところが、そこへ夜間の巡回をしていたパトカーがやってきて、ヘッドライトに映し出されてしまった健二達は、逃げることもできず、警察に連れて行かれました。実はこのバイクは、道端にとめてあったものを盗んできたものだったのです。

その後、それぞれ親に連絡をして迎えに来てもらうことになりました。

しかし、警察の待合室で二時間待つて、最後の一人になっても健二のお母さんは現れません。その間中、健二は、お母さんにどんなに怒られるかそればかりが心配でたまりませんでした。どう言い訳をするかそればかり考えていました。夜中の十二時を過ぎた頃、ようやく連絡のついたお母さんが警察署に飛び込んできました。いきなり怒鳴りつけられるのではないかとそればかり心配していた健二の見たお母さんは、なんと真つ青な顔をしていました。そして、心配で心配でたまらなかったという表情で健二を見つめ、大粒の涙を

ボロリとこぼしました。その瞬間、健二はお母さんに本当に申し訳なかったという気持ちになり、心の中で「お母さん、心配させてごめんなさい・・・」とつぶやいたのです。

翌朝、なんとなく気まずい雰囲気が漂う中、昨夜遅かったにもかかわらずお母さんがいつものように用意してくれた朝食を健二は食べましたが、おいしいとかおいしくないとかの感覚すら持つことができませんでした。結局、健二もお母さんも一言も会話を交わすことなく朝食を終えました。

事件の日を境にお母さんは仕事から帰宅する時間が以前よりも早くなりました。そして、夕食を済ませると夜遅くまで食卓で仕事の続きをするようになりました。しかし、健二には、お母さんがどことなく仕事に集中できなくて、元気がなさそうに思われました。

ある時、健二が食卓においてあった新聞をひろげた時のことです。スポーツ欄を見た後、次の紙面を開いてみると水がしみ込んだ跡がありました。さらに、その箇所の記事に目を向けたとき、健二は胸を締め付けられるような思いがしたのでした。

『無免許運転の中三逮捕』と書かれた小さな見出しが健二にはトップ記事のように大きく見えたのでした。

その後、健二は家庭裁判所に呼び出され、調査官の調査を受けました。調査官は温厚そうな男の人で、ニコニコしながら健二とお母さんの話を聞いていましたが、「みんなここへ来ると、必ず二度と悪いことはしませんと言っけれど、中にはまたすぐやってしまう人もいるんだよ。君の言うことをばくは信じたいけど、どうしたら信じられるだろうか。」と問いかけました。健二はしばらく考えていましたが、「お母さんを二度と泣かせたくないと 생각합니다。」と答えました。調査官は「君を信じよう。はじめてのことでもあるし、裁判官に報告して、裁判不開始の決定をもらうことにしよう。裁判不開始というのはこの事件について裁判を開かないで終わりにすることだよ。公に事件のことがわかるということはないけれど、悪いことをやったのは事実なんだから、これからは二度とこういうことをしないように、しっかりやるんだよ。」と励ましてくれました。

健二がお母さんの方を見ると、お母さんはハンカチを顔に当て泣いていました。調査官は「ごめんね。君の大事なお母さんを泣かしてしまったよ。」と笑いながら言ったので、今まで泣いていたお母さんまでが笑い出してしまいました。

活用に生かすための実践報告

「河原のできごと」

1 主題の設定

周囲の思惑を気にして友人の言動に左右されてしまう少年の姿と自戒に至るまでの様子を追求する。そして、ものごとを実行に移す場合、深く考えずに付和雷同するのではなく、自らの規範意識を高め、自らを律することの必要性を理解させたい。さらに、自分自身にかかわる行為が自分や他人にどのような結果をもたらすかということまで考えさせるようにする。

資料は、中学校生活に慣れた比較的気のゆるみがちな第2学年の時期か統計的にバイクに興味を持ち始め、暴走族との関係が危惧される第3学年の夏休み前に扱えば効果的なものと思われる。

2 指導過程の工夫

健二が友だちに誘われてバイクに乗るに至った付和雷同的な行動を過去の自分自身の実体験と重ねて考えさせたい。次に、健二が警察に迎えに来た母親の予想に反した表情を見て、自責の念に駆られる場面は、自分自身にかかわる行為が自分以外の者にも思わぬ結果を招くことを感じとらせたい。最後の家庭裁判所で調査官に「お母さんを二度と泣かせたくないと思います。」と言った健二の気持ちをしっかり把握しながら、学習を深めるためには、役割演技などを必要に応じて取り入れるようにしたい。

導入時の指導の工夫では、中学校卒業後、比較的早い時期に取得できる免許として、自動二輪の免許に視点を当てることは、本時の学習に対する意識付けになり、話合いを活発にする上で効果的である。

3 発問の工夫

どうしてまわりの意見に流される自分がいるのかを考えさせる発問を中心に自ら考え、善悪を判断して、実行することの大切さを考えさせたい。さらにはどのような局面においても自分の行動には責任が持てるよう誠実で自分を律した常日頃の心がけの必要性を訴えたい。

4 生徒の反応（授業後の感想）

物事の善悪が判断できても友だちからの誘いは断りにくいと訴える生徒が多かった。自分が判断し実行した行為が及ぼす結果について深く考えられるようにすることが必要である。

最後の家庭裁判所で主人公が言った「お母さんを二度と泣かせたくない」という言葉には多くの生徒が共感と感動を覚えた。

5 実践者からの一言

暴走族対策は本県で、大きな課題の一つとなっている。平成13年10月3日には県警から『今、暴走族へ入っている君たちへ』と題した緊急のメッセージが出された。積極的生徒指導の視点も含めて、心を育てるべく道徳的価値を高める授業をめざしたい。『生徒指導のてびき』（P29～40）と関連させて指導すると効果的である。

（三原市立第一中学校 中尾和彦）